

まちだ未来の会第6回学習会

## 文学館は市民にとってなぜ必要か！

ー文学館の「見えない価値」を“見える化”するー

日時：2017年10月29日（日） 午後2時～4時半 （台風の大雨）

場所：町田市民文学館ことばらんど 2階 大会議室

参加者：24名

司会（増山）

1. あいさつ（藺田）

2. 「文学館の知られざるお宝、目にみえない心おどる仕事」

元町田市民文学館館長 守谷信二

文学館は、町田市の再編計画において、最も厳しい状況にある。事業仕分けでは、5名の仕分け人（有識者2名、公募3名）により「きわめて廃止に近い要改善」という評価を受け、なぜ町田市でやるのか、図書館でできる内容があるのではないか、市民のニーズがあるのか、などが問われた。また、市長が5月に行われた「行政経営管理委員会」において、「なにをやっているのかがみえない」と発言した。そこで、文学館の仕事が少しでも見える話をしたい。

<資料：2016. 事業統計にそって説明>

1. 展覧会

展覧会は年4回行っている。その中で、夏の子供を対象にした展示「妖怪がいた！」は最高の16604名の観覧者があった。秋の「八木重吉展」は、10年目にしてやっと実現することができた。地元の方や、法政大学の協力を得ることができた。

ミニ展示は、遠藤周作「沈黙」一映画「沈黙—サイレンス—（マーティン・スコセッシ監督）公開記念。これら展覧会の関連事業でさまざまなイベントをおこなった。

2. 学習事業

大人のためのお話会は、毎回60名ほどの参加者があり、近くの老人施設からも参加。町田語り手の会が10年来続けている。ふわふわ座による「紙芝居・大人の時間」も毎月続けており、どちらも市民が活動している。

講演会、対談、座談会では、さまざまな著名人を呼ぶことができ

ており、「父を語る」では、遠藤龍之介（遠藤周作）、阿川佐和子（阿川弘之）矢代朝子（矢代静一）斎藤由香（北杜夫）各氏が集まった。この座談会の内容は、新潮社の「波」に2回にわたって掲載された。「本の雑誌」では、目黒孝二、沢野ひさし、椎名誠、木村晋介各氏が参加。

こども俳句教室は、春・秋にマイクロバスに乗って、薬師池や小山田緑地周辺で吟行を行い、秀作が生まれ、NHKの俳句コンテストで入賞した子もいる。乳幼児対象事業では、「0から1歳児ちちんぷいぷい」「2歳児あつまれ」「3・4歳児あつまれ」を計45回おこない、子育て支援として地域の期待を集めている。

### 3. 学習支援事業（出張事業）

「俳句で遊ぼう！」小学校への出前授業。2校。

「本とともにだちになろう」小学校への出前授業。1校

#### <資料「町田市民文学館の貴重資料」にそって説明>

特別閲覧資料として、地下2階に沢山の貴重資料を収蔵している。計88000点。

知られざるお宝としてまず紹介したいのは、遠藤周作氏が町田に来て間もなく書いた短編小説「土埃」下書き原稿。氏は、1963年40歳から60歳になるまで玉川学園に住んでいたが、町田の歴史を象徴する縄文土器の破片を拾うことがモチーフで、「ここに来ると、突然空気が変わる」と書き出される。ほかに、フランス、リヨン留学時に読んだフランス文学書約700冊（これは「光の序曲」として目録にまとめられている）。氏は、本を読むと裏表紙などに書き込みをする癖があり、寺門静軒「江戸繁盛期」などには面白い書き込みがある。書簡では、開高健のアウシュビッツより届いたハガキ、「とうとう見たぞ」と書かれている。連合赤軍事件で獄中にあった永田洋子との親交の様子が見えるハガキも興味深い。八木重吉の「雨の日」自筆原稿。「美しい十代」などの作詞で知られる宮川哲夫が、忠生一小に勤務していたとき子供の作文が書かれた学校の原稿用紙の裏に書いていた歌詞、戦時中の芥川賞作家八木義徳の日記、若林牧春の町田高校の校歌、川田総七の「ギリシャの海」など詩集3冊も貴重なものである。

#### ○心おどる仕事

文学館の事業は、展覧会にしても学習事業にしても、また資料の収集・保存にしても、市民が文学に興味や関心を持ち、市民自身が主体的に文学活動を行うために、そのサポートするのが目的。

その典型的な例は、市民協働事業として行っている「市民研究員制度」。市

民研究員制度は、文学館と市民が互いの力を出し合って、他の多くの市民に役立つ新たな文学的な価値を生み出して行こうという事業。これまでに、江戸時代の連句集を、今の人によめるように古文書の解読ができる市民が5年間かけて冊子にまとめたことや、児童文学に関心を寄せる市民が、瀬田貞二の研究をまとめたことなどがある。市内各地域の「文学散歩マップ」を作成したのも市民である。

また、「町田の文学」という新刊案内では、プロの作家の著作よりもむしろ一般市民の文学的著作や刊行物を紹介するように努めている。

#### <まとめ>

なぜ、文学館はなぜ市民に必要か？

##### (1) 文学の本質として

文学（芸術）は、物事の多様な見方、多様な価値観を提示することにより、「常識」や「権威・権力」に異議申し立てをするもの。したがって、本質的に少数者の声である。少数者の声を大事にしない社会は健全ではない。

例えば、

- ・遠藤周作の思想の根底にある「人間の内に潜む悪」という問い、永田洋子との関わり
- ・八木重吉の詩「人を殺さば」という詩  
「ぐさり！と やって見たし 人をころさば ころよからん」

##### (2) 地域の記憶として

有名無名を問わず、その地域で生きた人間によって生み出された文学的所産には、多かれ少なかれその土地と時代が影をおとしている。それらは地域の記憶として、その地域によって継承されなければならない。

- ・遠藤の「土埃」のような町田が舞台となった小説
- ・八木重吉や川田総七の詩

#### 事業仕分け

収入 330万円          支出 1億947万円

#### フリー討論

- ・見える化について。どのように、一般の人や市役所に知らせていくのか？  
(本田さん)
- ・たとえば文学館キャラバンなど、もっと外へ出ていく必要がある。民権資料館、版画美術館、文学館、この3つが連携を取り合って、アピールしていく

とか。お宝をどう使うのかも、研究グループを作って考えていってほしい。俳句ブームの今、創作の拠点となって、町田文学賞など作っていてもいい。

“ことばらんど”の名称を生かして「ことば」や表現全般をテーマにした活動を伸ばしたい。年1億の支出をとやかく言うなら、野津田競技場の30億はどうか。予算配分に問題ありではないか。(藺田さん)

- 作家の名前を出しても、文学に詳しくない人には訴えない。「なにを地域でした人か」を全面にだしてから名前を知らせていくと興味を持つ。文学館のことは、チラシやポスターでしか見たことがなく、あまり人の目にふれていない。地元愛のある若者が増えている今、ネットや、メディア(町田経済新聞など)を利用したらどうか。文学館は図書館と同じと思われがちなので、博物館のように貴重な資料があることを知らせるべきだ。(松嶋さん)
- 博物館の仕事をしていた。文学館は、地域の文学者を紹介してきたが、それは過去のことである。現在、将来に向かって創作しやすい場を作ることすすめてはどうか。ポプリホールのショートフリーコンテスト(映像)で実行委員をやっているが、全国から募集している。市長賞を作ったことから市長もやる気になってきている。文学館も市民の実行委員会を作って文学賞イベントをやるのはどうか。その際、レベルを高くめざすといい。地元の行事だからと甘くなつては駄目だ。(清原さん)
- 鎌倉の文学館は、鏑木美術館と社団法人で運営している。市が運営するとはかぎらない。また、町田の文学館のHPを見ると、本を貸し出しますとかいてあり、何をやりたいのかと思った。今日の貴重な資料の話は、雑学大学でも取り上げたい。(佐野さん)
- 元行政マンである。行政が、どう責任をもつか。なんのためにやるのか。財団法人であっても、行政がかかわることに変わりはない。事業仕分けをみると、仕分け人の知識が欠け、情けない。(安藤さん)
- 生涯学習として、史考会で公共施設の会議室を利用している。近くに必要施設があることが大事だ。行政は、その利用状況をちゃんと評価しているのか? 実際申し込み多くなかなかとれない状態だ。(西山さん)
- 今開催中の谷田昌平展の展示は素晴らしい。図録もよく、ゆっくり見られた。小樽の文学館は、伊藤整の生原稿がすごい。鎌倉は、旧前田公の建物がいい。八木義徳さんの山崎団地のお宅には、ケースワーカーとしてなんども訪ねたことがある。そのとき資料を寄贈してほしいと頼んだ。市の職員として、事業仕分けをおこなったことがあるが、説明する課長が、しっかり意義やありかたを言えることが大事。言えるか言えないか、それを支える市民の力が必要である。町田リス園は年間10万人来園者があるので評価されている。(鈴木さん)

- ・過去に光を当てることは大事だが、若い人に光を当てることを考えたい。古内和江さんの騎士の作品など素晴らしいので、出版社の協力も得て取り組んではどうか。ことばの力が大事で、知の力を育てないと未来はない。

(松本さん)

### 3. まちだ未来の会の活動報告 (鈴木真佐世)

#### 請願活動

＜市民生活に根ざした「公共施設再編計画」の策定を求める請願＞

1699筆の署名集まり、9月8日の総務常任委員会で審議された。1項目の「十分な情報公開と合意形成のための機会と時間を確保すること」については多くの賛同が得られたが、2項目の「各施設の計画案または見通しを早急に提示すること」の文言が1項目と矛盾があり、文言の整理後再提出することとして、継続審議になった。

＜鶴川図書館の存続を求める請願＞

6000筆近い署名が集まり、9月29日の本会議で採択された。図書館活動をすすめる会の機関誌「知恵の樹」に、鶴川地区の自治会を中心になってまとめた富岡さんが文章を書いているので読んでください。

10月から町田市民文学館の存続を求める請願活動が始まった。9つの町内会長が請願者となっているほか、森村誠一氏など著名な方々も支持者として名を連ねている。署名をお願いします。

#### 今後の予定

- |        |                           |                          |
|--------|---------------------------|--------------------------|
| 第7回学習会 | 11月23日(木)                 | 市民フォーラム                  |
| 特別イベント | 仮題「町田の文学を愉しむ—ジャズと詩の朗読の夕べ」 | 中上哲夫さん(詩人) + 沖田大佑さん(ピアノ) |
|        | 11月29日(水)                 | 19:00                    |
|        |                           | カフェ・イマジン(成瀬)             |
| 第8回学習会 | 12月16日(土)か17日(日)          |                          |
|        |                           | 仮題「さるびあ図書館はどうなる! どうする!」  |
| 第9回学習会 | 2018年1月                   |                          |
|        |                           | 市議員との意見交換など。             |

記録(庄司)